

# 図書だより

10月

田原本町立北中学校  
令和3年10月  
第6号

## 深まる秋

体育大会は本当に白熱しましたね！ みんなの一生懸命頑張る姿に、胸が熱くなりました。「一生懸命がかっこいい！」それを体現してくれた体育大会だったと思います。

文化祭も、様々な制約がある中、みんなの頑張りがきらりと光りました。文化鑑賞会では、3年生や岩本先生が体を張って盛り上げてくれました。吹奏楽部の演奏は3年生の部員にとって最後の舞台ということで、3年生の「良い演奏を届けたい」という想いと、後輩たちの「先輩たちとの最後の演奏を成功させたい」という想いが重なって、すごく心温まる演奏でした。3年生の堂々としたソロ演奏を聴いていて、目頭が熱くなりました。全校生徒及び各クラスのクラッピングも、限られた時間の中で一生懸命練習した成果がよく表れていました。人権作文では、各学年を代表して3名の生徒が発表してくれましたが、どの作文を聴いてもとても考えさせられました。

大きな行事が終わって少しホッとしたところで、読書にふけてみませんか？ 新刊も少しずつですが入荷しています。ぜひ図書室に来てみてください。

## 恋愛小説がアツイ

夏休みに1・2年生が書いてくれた読書感想文を読んでいると、恋愛小説がとても多いことに気づきました。スターツ出版のライトノベルが人気だったようで、多くの方が感想文を書いてくれました。今、中学生に求められているのは「恋愛小説」なのか？ というところで、夏休みによく読まれていた恋愛小説を図書室にも置いてみることにしました♡ この機会にぜひ読んで、キュンキュンしてみてください。

### 夏休み一番人気！



「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」／汐見夏衛（スターツ出版）  
親や学校、すべてにイライラした毎日を送る中2の百合。母親とケンカをして家を飛び出し、目をさますとそこは70年前、戦時中の日本だった。偶然通りかかった彰に助けられ、彼と過ごす日々の中、百合は彰の誠実さと優しさに惹かれていく。しかし、彼は特攻隊員で、ほどなく命を懸けて戦地に飛び立つ運命だった——。のちに百合は、期せずして彰の本当の想いを知る…。涙なくしては読めない、怒濤のラストは圧巻！



「桜のような僕の恋人」／宇山 佳佑（集英社）  
美容師の美咲に恋をした晴人。彼女に認めてもらいたい一心で、一度は諦めたカメラマンの夢を再び目指すことに。そんな晴人に美咲も惹かれ、やがて二人は恋人同士になる。しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。美咲は、人の何十倍もの早さで年老いる難病を発症してしまったのだ。老婆になっていく姿を晴人にだけは見せたくないと思悩む美咲は……。



「九月の恋と出会うまで」／松尾由美（双葉社）  
「男はみんな奇跡を起こしたいと思ってる。好きになった女の子のために」—ある夜、北村志織は部屋の壁の穴から“一年後の今日”を生きている平野という男性に話しかけられた。平野は、同じマンションに住む顔見知りだった。翌日の新聞の見出しを次々と言い当てる平野に、志織はひとつの願いをされる。“未来の平野”には、ある目的があった……。



「ないものねだりの君に光の花束を」／汐見 夏衛（KADOKAWA）  
すべてにおいて普通で、自分は“永遠の脇役”だと思っている高校生・影子。同じクラスには、世間を賑わすアイドルで、学校でも人気者の真昼がいる。そこにいるだけで目立つ彼は、まさに“永遠の主人公”。影子とは別世界すぎて親しく話したこともなかったが、一緒に図書委員をすることになったのがきっかけで、真昼の陰の部分を知ることになる。

9月の多読賞！

順位	1年生	冊数	順位	2年生	冊数	順位	3年生	冊数
1		7	1		18	1		11
2		4	2		6	2		6
3		3	3		5			6
4		2	4		4	4		3
		2			4			3
				6	3			3
				7	2			3
					2	8		2
					2			
					2			

# 読書感想文のご紹介

北中学校では、1・2年生の夏休みの宿題として「読書感想文」に取り組みました。その中で6名の作文を県のコンクールに出品しました。その一部を紹介します。

読書感想文は中学生になって初めて執筆する長文作文です。授業で学習しているとはいえ、どのように書けば良いか悩みながら書く人も多いと思います。内容も当然ですが、書き方についても参考になるところが多いと思います。ぜひじっくり読んで、今後の参考にしてください。また、紹介されている本についても、きっと興味をもってもらえると思います。図書室にも置いている本なので、読みたいと思った人はぜひ借りて読んでみてください。

## 「カラフルな未来のために」

田原本町立北中学校

「僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー」 この作品は、僕が小学校の時にテレビで見ていると「世界一受けたい授業」という番組で紹介されていて、タイトルのインパクトがあったので、面白そうだとずっと気になっている本でした。

タイトルである「僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー」は、作者ブレイディみかさんの息子がノートの端に小さく書いた落書きです。意味は黄色人種の母と白人の父の間で生まれた子供で、気持ちはブルー。このブルーが「怒り」の意味で書かれたのか、「悲しみ」の意味で書かれたのか、なぜそう思ったのか僕の中で興味がふくらみました。

話はノンフィクションで、作者である日本人のお母さん、アイルランド人のお父さん、その子供で中学生の息子の、イギリスのブライトンという町での生活の話です。お父さんは大型ダンプカーの運転手で、お母さんは息子が生まれてから保育士として託児所で働いていました。息子は名門で平和なカトリックの小学校に通っており、生徒会長を務めるほど順調な学校生活を送っていました。しかし、中学校では殺伐とした英国社会を反映するリアルな「元底辺中学校」へ入学したことで、様々な体験をしました。本には、その中学校生活の初めの1年半の生活の様子がつづられています。

この本を読むまでは、「イギリス」に対して「サッカー」「紅茶」「イギリス王室」のイメージが強く、首都ロンドンもおしゃれで華やかなイメージがありました。本を読んで初めて、ご飯をまともに食べられない子、学食で万引きをする子、ボロボロの制服を着続けるしかない子などがあると知りました。子どもの貧困問題や、様々な国からの移民が多くいるために起こる人種差別などの問題が、日常にあふれていると知りました。東洋人への差別、宗教的な問題、本当に知らないことだらけだということに驚きました。僕たちが通っている中学校も公立中学校ですが、給食があり、みんな平等に給食を食べることができるし、通っている生徒もほとんどが日本人なので、人種差別を学ぶことはあるけれど、どこか遠くの話のように感じていました。人種差別と聞いて、黒人差別を思い浮かべ、自分たちが「イエロー」と差別される側であることを想像していませんでした。けれど、そう思っていること自体が、自分が無知で今まで何も考えずに過ごしていたということなのだ気づきました。

本の中に、「エンパシー」という言葉が出てきます。この言葉も、僕は初めて聞きました。日本語にすれば、「共感」「感情移入」「自己移入」という意味があるそうです。意味を聞いても「？」しか浮かばない僕と違って、本の中の息子は「エンパシーとは何か」という試験の問題に悩むことなく「自分で誰かの靴を履いてみる」と答えます。この答えがすごく印象的でした。少し「エンパシー」という言葉の意味が分かったように思います。今まで人の気持ちになって考えるということは、小学校から道徳等で考えることがありましたが、それはどちらかと言うと、この本の「シンパシー」「同情」に近かったのかなと思いました。気持ちを考えるだけでなく、もう一歩踏み込んで「自分ならどうするか」を考え、行動できることが大事なのだと思います。

そして、もう一つ印象的な言葉があります。それは、母ちゃんの「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいこと」という言葉です。東京オリンピックでも「多様性」という言葉をよく耳にしました。「多様性」についてなんとなく理解していたつもりで聞き流していましたが、母ちゃんの言葉が改めて考えるきっかけになりました。似た環境、同じ人種、言葉、文化、考えの人と一緒にいると楽し、居心地がいい。けれど、それでは無知のまま、知らないうちに人を傷つけることがあると考えると、怖いなと思いました。実際、この本を読むまで「ガイジン」や「ハーフ」という言葉が失礼な言葉と知らずに使っていました。日本もこれからますます多様性が求められるようになっていくと思います。人種、ジェンダー、アイデンティティ、経済格差、環境問題、僕には知らないことがたくさんあります。無知であることを理解し、本を読んだり、色々な人の話を聞いたり、話し合ったりすることが、多様性への第一歩だと思いました。

最後に、息子が自分を「未熟」「経験が足りない」という意味で「グリーン」と表現します。僕も今は「グリーン」だなと思いました。そして、これから僕もカラフルな、色々な色に変化できるように知ろうとする気持ち、行動を心がけていこうと思います。

みんながそれぞれ輝けるカラフルな未来を目指していきたいです。



「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」  
ブレイディみかこ（新潮社）  
人種も貧富の差もごちゃまぜの元底辺中学校に通い始めたぼく。人種差別丸出しの移民の子、アフリカからきたばかりの少女やジェンダーに悩むサッカー小僧……。まるで世界の縮図のようなこの学校では、いろいろあって当たり前、でも、みんなぼくの大切な友だちなんだ――。優等生のぼくとパンクな母ちゃんは、ともに考え、ともに悩み、毎日を乗り越えていく。最後はホロリと涙のこぼれる感動のリアルストーリー。

※2巻も発売されました。北中学校図書室でも購入する予定です。ぜひ一度読んでみてください。